	学校名:長野市立鬼無里中学校	● 実践教科等: 道徳・人権
	氏名:新井秀和	● 時間数 : 4 時間
<b>Viet Nam</b> [担当教科:社会科]		● 対象生徒 : 全学年
		● 対象人数 : 17 人

## 1 単元名

「僕たちの豊かさとはなんだろう～ベトナム在住ビンさんの発言から～」

## 2 単元の目標

**ESD の視点に立った学習指導で重視する能力・態度(国立教育政策研究所が例として示したもの)**

- ・ベトナムの生活や文化を日本と比べる活動を通して、他国への興味関心を深める。  
(多面的・総合的に考える力)
- ・ベトナムで活躍する日本人の姿やベトナムと日本との人的、物的交流の様子を知ることを通して、お互いの関係に気付く。  
(つながりを尊重する態度)
- ・仲間との意見交換を通して、自分と他者との相違に気付いたり、新たな考え方があることに気付く。  
(コミュニケーションを行う力)
- ・自分が出会ったことのない価値観や難問に対して、仲間と一緒に考えて、自分なりの考えをもつことができる。  
(他者と協力する態度)
- ・出された意見に対して「でも」という観点から考察し、論理的に物事を考えることができる。  
(批判的に考える力)
- ・学年の枠を超えて、課題について追究している。  
(進んで参加する態度)

## 3 資質・能力育成に向けた授業づくりの視点(国立教育政策研究所・2014)

- ・単元を貫く学習問題(問い)を設定し、ベトナムから生徒の内面に入る展開にする。【1】
- ・「豊かさ、貧しさ」について、生徒の生活体験から感じる事柄を尊重する。【2】
- ・生徒が出会った新たな価値観について、グループ活動を通して、仲間の意見を聞きながら自分の意見を深められるように視点を絞ったグループ活動を行う。【3】
- ・単元を通した学習目標を明確にし、生徒の思考を妨げることがないように提供資料の厳選をはかり、資料よりも思考の時間を多く確保する。【4】
- ・単元最終時は、それまでに学んできたことが積み重なった状態で開始し、本単元で生徒に獲得してもらいたい学習目標のまとめの位置付けにする。【5】【6】
- ・各時間必ず生徒同士の話し合いの時間を確保する。【7】

## 4 単元の指導について

### (1)教材観

海外研修ではベトナムのビンさん一家にホームステイする機会を得た。ビンさん一家は、みんな親日家で、日本語も堪能である。滞在中、「日本は食事がおいしい。」「日本人はみんなしっかりしている。」「日本人はみんなやさしい」など話してくれた。しかし、私はビンさんから、「私は、日本が好き。でも、日本はベトナムよりお金があるのにどうして自殺する人が多いの?」と問われた。

また、青年海外協力隊の篠田さんにもお会いし、篠田さんは、ベトナムでの活動を通して、「ベトナムは日本より技術的にも金銭的にも遅れているとことがあるけれど、ベトナム人に接していると本当の豊かさってなんなのだろう、ベトナムは日本より豊かなんじゃないかな、とも思えてくる」とおっしゃっていた。

ビンさんの「お金があるのになんで自殺者が多いのか?」、篠田さんの「本当の豊かさとはなんなのか?」と言う問いに生徒たちは何と答えるだろう。豊かなこと＝お金があること、と最初は考えるのではないだろうか。

これをスタートにし、途上国の代表としてベトナムを理解し、豊かさについて考えていきたい。考える過程で豊かさ＝お金があることではないことに気づき、ではどういうことが豊かなのかを友達と相談し、それを具体的に生徒の内面で自覚できる活動を行いたい。その上で、物事には多様な見方があり、そ

の見方がこれからの社会で生きていく上で重要であることに気づいて欲しいと願った。

### (2) 児童生徒観

本校は、長野市西部の山間地に位置している。春には水芭蕉がきれいに咲き、冬は、豪雪に見舞われる。また、高齢化率も 60%を越える少子高齢社会が進んだ地域である。このような地区において、1 年生 2 名、2 年生 9 名、3 年生 6 名合計 17 名の生徒が本校に毎日登校している。

各学年の色はあるものの、全体として素直で様々なことに意欲をもって活動することができる。

しかし、全校生徒の共通課題として、多様な考えに触れる経験が少なく、考え方も固定化し、物事を多角的に見たり、他者の意見を参考にして自分の考えを見直すということが難しい点がある。

そこで本単元では、ベトナム研修の写真やビデオ、JICA の方のお話を通して、生徒たちのもつ価値観に新たな価値観を提示し、生徒たち自身が物事を多角的多面的に思考できればと思い本単元を設定した。

### (3) 指導観

国際理解教育は今に始まったことではない。もう何年も前から行われている。多文化共生、他国を知る・・・これらの活動は、私自身も何回も行っている。しかし、社会の様子を見ると必ずしもそれらの結果が出ていないように感じられる。それはなぜなのか、と考えたとき、

#### ① 生徒の実態に合っていない指導

国際理解と言っても、生徒は、外国に行ったこともなければ、外国に興味すらない子もいる。そのうえで、友達関係で悩んだり、家族関係で苦しんだりという状況が多々ある。その中で多文化共生と言っても一時的には「仲良くしていこうと思います」のような発言がでるが、継続性はないだろうし、国際社会への探求は進まないと思われる。

#### ② 指導者の趣味的指導(指導者本位の指導)

指導する立場の者が、自分の好きなこと、興味のあることに走り、独走している感があるのではないか。ある意味指導者の興味は必要ではあるが、それが生徒の実態に合っていない可能性がある。

以上の理由により、国際理解教育の基本は、「世界」という場面ではなく、もっと生徒個人の内面にアプローチしていくことから始めなければ意味のないものになってしまうのではないかと考えた。よって、本単元では、ベトナムという窓を使い、生徒の内面にアプローチする授業を展開した。そのために、具体化した事案、思考から生徒の内面が開くように教材、問い、学習形態を工夫するようにした。

## 5 評価規準

観点	ベトナムに興味をもつこと(興味関心)	他の価値を尊重すること(価値・態度)	内面に働きかけること(技能)	学習に関すること(知識)
評価規準	ベトナムについて、自然、文化、社会の仕組み等を熱心に調べ、自分なりのベトナム観を持つことが出来る。	・現代社会に生きる一員として、自分の生活を振り返りながら、これからの生き方を考えている。 ・他の考え方を尊重している。	・他者の考えに寄り添い、自分の考えや気持ちを表すことが出来る。 ・教材等を通して、自分の内面に働きかけ、多角的に物事を考えることが出来る。	JICA 等の活動から、発展途上国のために、日本人が自分の特性を生かし、国際協力を行っていることを理解している。
評価方法	・学習カードのへの記載内容 ・友達との話し合いの様子、付箋への記入内容、発表			

## 6 単元の構成

時限	小単元名	学習のねらい	授業内容
1・2	豊かな国・貧しい国とはなんだ？	生徒の持つ「豊かな国・貧しい国」観を出し合い、全体でどんな共通項があるのかを知る。	「豊かな国」「貧しい国」についてのイメージ、初感をもつ。 *この時間の初感を大切にし、視覚化し、5時につなげていく。
3	途上国 ベトナムについて知ろう。	ベトナムの自然、文化、社会の仕組みなどを知り、生徒のベトナム観を作る。	ベトナムはどこにあるのか、自然環境はどんな様子なのか、民族衣装、よく食べるもの、収入などベトナムの様子について触れ、最後は生徒1人1人が「ベトナムとは・・・」の・・・に自分なりの言葉が入りようにする。
4	日本とベトナムの関係を知ろう。	日本とベトナムはどんなつながりがあるのか、歴史・貿易・人の面から理解する。	江戸時代、ベトナムに日本町があった事実や日本のアパレル関係の工場がベトナムに存在すること、ベトナムでは日本語が重要視されつつある現状を理解し、日本とベトナムの友好関係を知る。
5	「僕たちの豊かさとはなんだろう～ベトナム在住ビンさんの発言から～」	生徒の内面を通して、自分たちなりの豊かさ、貧しさ観をもつ。	ビンさん、篠田さんの発言を参考にしながら、日本と他国との自殺者数の推移や原因を考察し、そこからグループ活動等を通して、生徒の内面にアプローチし、豊かさ、貧しさを考える。

## 7 授業事例の紹介

小単元名【僕たちの豊かさとはなんだろう～ベトナム在住ビンさんの発言から～】

### (1) 指導案

(ア)実施日時 11月6日(月)第5限

(イ)実施会場 3年教室

#### (ウ)本時の目標

経済的側面などで豊かさを考えていた生徒たちが、ベトナム在住のビンさんや青年海外協力隊としてベトナムに派遣されている篠田隊員の言葉から、自分のもつ豊かさの概念について、友達の意見や各種資料を参考にして、再考する活動を通して、豊かさを多面的に考え、それが生徒の内面に自覚することができるようにする。

#### 人権教育の視点

国際社会で活躍する日本人や現地の人の話を通して、自分の生活に寄せながら、友達の考え・感じ方を尊重し、自分の考えをもつ。

#### (エ)指導のポイント

- ・自殺は決してしてはいけないことであることを押さえるが、「命」に深く入りすぎると主眼から離れてしまうのでバランスを考えた導入にする。
- ・篠田隊員の「日本より何もかもが足りないのにベトナムにいと本当の豊かさってなんだろう、と疑問に思う」という発言を生徒が本当の豊かさを考え始める直前で紹介し、「豊かさ」という課題を鮮明にしたい。ただし、状況に応じ、篠田隊員の発言が生徒の思考に混乱を及ぼすなど感じた場合は、生徒にこの発言を紹介しない。

#### (オ)本時の展開

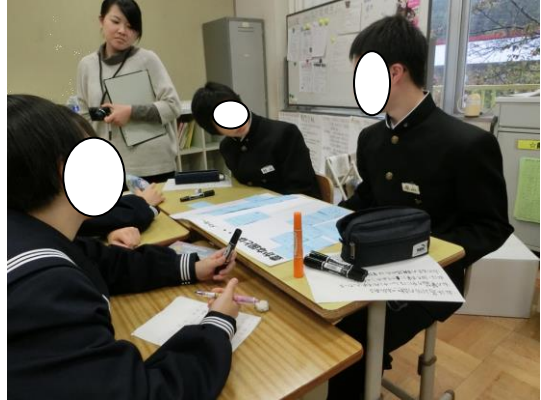
過程・時間	指導内容	学習活動	指導形態	指導上の留意点	評価 (評価規準・評価方法)
導入 10分	1 ビンさん、篠田さんの発言を紹介する。	○自分の豊かさの定義を見返しながら、ビンさんの発言を考える。 ○世界、日本、長野の自殺の状況を知る。 ○日本って世界の中で自殺が多い国なんだ。 ○長野県も自殺が多い。	一斉	・ビンさん一家が親日家であることを知る。 ・ビンさんが「私は日本が好き。ベトナムよりお金もあるし。でも豊かなはずの日本でどうして自殺が	

<p>展開 30分</p>	<p>2 豊かさについて考える。</p>	<p>○篠田さんの発言を考える。</p> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin: 10px 0;"> <p>僕たちの豊かさってなんだろう？</p> </div> <p>○当初自分で持っていた豊か観の見直し。 ○豊かなこととはなんなのか。 &lt;個人追究&gt; ・ゆとりがある生活なのか。 ・ある程度のお金もいるけれど、気を使わない人間関係を作ることなのか。 &lt;全体追究&gt; 自分の考えと友達の考えを自由に動き回って、説明し合う。 ・ある程度のお金も必要だけれど、気持ちのゆとりがあることが大切なのか。 ・みんなで助け合えればいいのか。 &lt;個人追究&gt; 全体追究で感じたことをもとに再度自分の考えを振り返る。 ・○○さんの考えた方はその通りだと思う。 ○○さんの考えを参考にして考えると、豊かさはお金より別の何かにあるのだと思う。 ・お金はさほど重要ではなく、楽しいな、と思える生活環境が豊かさなのか。 &lt;グループ追究と発表&gt; 全校道徳1時間目でまとめた「豊かな国」の再考をする。</p>	<p>個人 ↓ 全体 ↓ 個人 ↓ グループ</p>	<p>多いの？」という発言を紹介する。 自殺は決してしてはいけないことを押さえる。 自殺原因にはあまり深入りしない。 生徒の持つ豊か観とピンさんの発言をつなげ、篠田隊員の発言を紹介し、本題に入る。</p> <p>思考を助けるシートを用意し、自由に見えるようにしておく。(日本の課題がわかる資料) 日本国全体として金銭的に恵まれている点を理解した上で、ミニマムな視点からみると、どんな問題が浮かんでくるかを机間巡視をしながら問う。 抽象的な思考で止まっている場合、生徒自身の実生活に照らし合わせて具体的な言葉、事項で語ることができようにしたい。そのため教師から生徒の記載内容や話している内容に質問したり、実生活で言うところのどんなことが該当するのかを問いながら考えの具体化をはかる。 全校道徳1時間目と思考が変わってきている点について、その理由を机間巡視等で確認しながら進める。</p>	
<p>まとめ 10分</p>	<p>3 学んだことの振り返り</p>	<p>○学習を振り返り、感想を書く。 ・最初は、豊かさとはお金があることだと思ったけれど、お金以外にも仕事に追われない生活などゆとりが大切なんだと思った。 ・やはりお金は大切。でも、お金を稼ぐためにはある程度の休憩も必要なんだと思った。 ・友達がいること、家族がいること、当たり前を当たり前感謝することができるのかな。</p>	<p>個人 ↓ 一斉 全体</p>	<p>JICA職員の方の話をお伺いする。</p>	<p>様々な資料や対話を通して、自分なりに豊かなこととはどんなことなのか理由を明確にして学習カードに記入しているか。</p>

(2) 授業の振り返り

<良かった点>

- ・本校は小規模校であるため、今回全校生徒を 1 つの教室に集め、一斉に授業をおこなった。各学年のよさが発揮された授業展開になり、今後の学校教育の方向性をはかることが出来た。
- ・5 時間それぞれ独立した授業ではなく、最後の5時間目につながるよう工夫した5時間とした。単元を貫く問いとして「豊かさとは？」を設定したが、一貫性をもった展開であったため、5時間目は生徒たちにとって考えやすいものになったのではなかとと思う。
- ・「自分を大切にしてほしい」というメッセージがこの授業の目指すところであった。最後のまとめでは、抽象的なことではなく、生徒の生活に根差した発言、考えが全体に共有されることになりよかった。
- ・最後に JICA の方のお話もお伺いすることができ、それも生徒の思考を助ける一つ的手段になったと思われる。



<改善点>

- ・最後、生徒が自分の生活に根差した発言が見られ始めたが、時間の関係であまり深く掘り下げたり、生徒同士の発言を上手につなげることができなかった。生徒同士の話し合いに時間を割きすぎたためだと思う。メリハリを持った話し合いを授業の中に位置づけていきたい。
- ・豊か、貧しいという幅が広い言葉であるため、生徒の意見が多岐にわたった。もう少し言葉の幅を縮めるように具体的な名詞をつけて生徒に提案すればよかった。

(3) 使用教材



2012年人口10万人に対して・・・

1位	北朝鮮
2位	韓国
3位	ガイアナ
4位	リトアニア
5位	スリランカ
6位	スリナム
7位	ハンガリー
8位	カザフスタン
9位	日本
10位	ロシア

日本: 23.1人  
ベトナム: 5人



- ・人間関係・・・人の目ばかり気にしてしまう。
- ・仕事がうまくいかない。
- ・仕事の時間が長く、心が疲れてくる。
- ・疲れてしまい、心が病気にかかってしまった。

日本社会には、人々が生きづらくなるような社会的な悪条件や困難が多い。 清水康之

ベトナムへ派遣されている  
青年海外協力隊  
篠田紗枝さん



ベトナムは日本と比べてモノもお金もない。けれど、ここで生活していると、みんな楽しそうで  
本当の豊かさって何なんだろう・・・って思っています。

\* 授業で使用したパワーポイントの一部。

(4) 参考資料等

- ・警視庁のホームページ
- ・清水康之他:「自殺社会」から「生き心地の良い社会」へ など

## 8 単元を通じた児童生徒の反応/変化

1時間目に「豊かさ、貧しさとは？」から導入した。

予想通り、生徒たちは「お金があること」「経済的に豊かなこと」など経済的側面で豊かさ・貧しさを定義していた。授業回数を重ねてもどこか他人事のような意見が多くみられた。



ビンさん・篠田さんの発言：生徒たちの内面に働きかける教材



日本は生活しているとしんどいのではないかと、生活しにくい環境にあるのではないかと、という考えが教室中に広がる。そこで、

T：「どういうことがしんどいのかな？」

A生：「文化祭の時、自分は一人ではないかと思って苦しかった。やることが多くて……。自分のできなさに悲しくなった。でも、誰かに相談すればよかったのではないかと今思う。」

B生：「(部活の)部長としてすごく自信がなくて、不安だらけだった。」

C生：「友達関係ってすごく難しいなって思う。なんていうか……」

T：「なるほどね。でも日本ってお金あるから豊かなんじゃないの？」

D生：「確かにお金はあるけど、自殺する人がこんない多いんじゃあ豊かじゃないし、お金ではどうにもならないよ」

D生：「やはり、相談できる、頼ることができる社会がいいんじゃないかな……」

というような流れになった。

当初、生徒にとって他人事のようにであった「豊かさ・貧しさ」について、本単元を通して、生徒の内面を揺さぶり始めた事がわかってきた。

人間関係が大事、ここが分かって…勝手な解釈で可か  
 大きい学校(日本)と、鬼無里のような小さい学校(ベトナム)では、  
 人間関係を比べると小さい学校のほうがみんな知っているような  
 感じだから、小さいけれど豊かという人はいないかと思っただけ。

## 9 授業実践全体の成果と課題及び課題の改善策

「今の社会は国際社会だ！みんなで共存共栄だ！」  
 と言ったところで、生徒たちにとっては、実感が乏しいものになってしまうだろう。

そこで今回の授業を通して、まず自分を知ること、自分を大切にすることが心に余裕が生まれ、他者理解他国理解につながると考えた。当初、他人事のように考えていた生徒たちであったが、回数を重ねるに従い、生徒は、自分の内面に働きかけ物事を考えるようになってきてよかったと思う。

今後は、その内面をどう教師サイドで受け止め、日々の生活で生徒に返すのか、そしてそれをどう国際社会へとつなげていくのかが課題として残る。様々な体験を計画的に学校活動に位置づけ、生徒一人ひとりの自己肯定感を高めながら、「国際社会の場面」と出会わせて行くことが大切のような気がした。

この全校道徳を通して気づいた事があまりました。それは、  
 日々の中で、これが良いとか悪いとか決めつけている人でも  
 冷静にな。考える事で、何が豊かさかと聞かされたとき  
 パツとは答えられない、考える事では大切な事は無いともい  
 えますね。

## 10 教師海外研修に参加して

ベトナム派遣前研修時に授業案を提出した。「ベトナムと日本の文化の違い」のようなものだ。内容は、薄く、自分自身でもなんとなく納得できていなかった。そして、ベトナムに出發。様々なことを経験したり見たりする中で、生徒たちの「困り感」がなぜか思い出されてきた。生徒たちは友達関係、勉強のこと、進路のこと……様々なことで悩んでいる。そのような生徒たちに、私は海外研修で学んだことを生かしてどうアプローチすればよいのか。そう悩んでいると、ホームステイ先のビンさんの発言と青年海外協力隊の篠田さんの発言が私にヒントをくれたような気がした。

研修に参加して「大きなこと」を扱うのではなく、もっと生徒の身近にあることを大切にして、そこから授業を作り、生徒に語らせる。そして、語る幅を段階的に広げ、その中に「国際社会」というものを意図的に位置づけることが大切なのではないかと感じるようになった。

生徒にとって身近な大人としての教師になる、そんな意識が芽生えた研修であった。